

保健衛生指導者育成プロジェクトの評価のため、8月にカンボジアに行ってきました。

カンボジアは、約40年前のポルポト政権時に、推定150万～200万人の人々が虐殺され命を失いました。私にとって3回目のカンボジア渡航となった今回は、今もなおその当時の影響を受けていることを改めて感じ考える旅になりました。また、教育の格差を実感する旅でした。

首都プノンペンにあるトゥールスレン博物館、キリングフィールドを訪れた際、大量虐殺が行われた事実と直面しました。キリングフィールドでは歩いている私たちの足元に虐殺された人の歯や骨片、衣服がいまだに落ちています。母親の目前で赤ちゃんが頭から打ちつけられ殺されたキリングツリーの前では、不条理さで涙が出そうになりました。経済発展の著しいカンボジアですが、こうした歴史の上に成り立っていることや、平和の尊さを再確認しました。

小学校や病院の視察

虐殺の対象として知識を持っている人々、とりわけ教員や医療者は標的にされたため、ポルポト政権が崩壊後も教育や医療の発展が遅れるのは必然です。セカンドハンドがそこに手を差し伸べ、これまで支援した小学校や医療施設の視察に同行させていただきました。セカンドハンドが建設した施設は、多少の傷みはありましたが修理しながら大切に使われていました。小学校では図書室が教室として、また、病院もERが病室として使用されており、当初の目的とは違う使われ方になっていたところもありましたが、有効に大切に使われてきた様子がうかがえました。いずれの小学校、医療施設も衛生的な環境でした。まだまだ学校の教室が少なく午前と午後に分かれて2部制にしていたり、正規の教員が少なく教育の質が問われる現状はありますが、政府の支援を受けて校舎や病院が新しく増設され、それぞれ自立し発展していました。

また、セカンドハンドが新たに校舎の建設支援を検討している貧しい山村部の小学校にも訪れました。トタン屋根の木造の校舎で、築2年だそうですがシロアリに食われ今にも崩れそうで、あまりのひどさに驚きました。床は土のままで生徒は裸足です。きっと雨の日は雨漏りし、さらに薄暗い中での授業なのだろうと想像しました。とても衛生的とはいえず、正規の教員も1人で都市部の学校との格差を感じました。子どもたちの保護者は学校に行けなかった人が多いですが、自分の子どもには教育を受けさせたいという強い熱意を感じました。このような学校こそ支援してあげたいと思いました。

保健衛生指導者育成プロジェクトの評価

ホームランドの先生が子どもたちに保健衛生について教えられるように、これまで4回にわたり手洗いや歯磨き、傷や目の手当等の指導を重ねてきました。ホームランドの先生たちにお話をうかがったところ、「教わったことを家族や友人、近所の人に教えてあげた」と

多くの先生が応えてくれました。また、子どもたちの親に手洗いや歯磨きの状況を確認して、子どもたちの変化を実感した先生もいました。先生たちは、子どもたちの頭にシラミがいること、貧血で倒れる人が多いこと、スマホゲームで子どもたちの視力が低下していること、食事や栄養のこと、雨に濡れてたびたび風邪を引くこと、お腹をこわすこと等、たくさんの関心ごとを挙げてくれました。このように保健衛生について関心が深まっている様子がうかがえましたが、「学校では保健衛生について教えないで、まだまだ子どもたちに教える必要がある。自分たちだけでは正しい知識を得られないから、できることならもっと（保健衛生指導者育成プロジェクトを）続けてほしい」と要望されました。

家庭訪問をして子どもや保護者にも話をうかがいました。傷や目の手当について学んだ子どもは、学んだことをしっかり覚えていて復唱してくれました。学んだことを友だちにも教えてあげたそうです。食事の前に手を洗ったり、1日に1回は歯磨きをするようになったと少しづつ習慣になっているようでした。

保健衛生指導者育成プロジェクトは、対象がホームランドの周辺に限られ、目に見える成果は小さいかもしれません、一歩ずつ着実に積み上げられているように感じられました。セカンドハンドは小規模な法人だと思いますが、小さい組織だからこそ相手と信頼関係を築いてできた支援だったと思います。一方、学校や病院の支援は、多くの生徒や病院を利用する人々の役に立ち、小さい組織でも大きな成果を上げることができる支援だと思いました。組織が小さいからこそできる支援、小さくてもできる支援、支援の在り方が垣間見えました。

今回も明るくおおらかなカンボジアの人たちや子どもたちの笑顔に癒されました。これからも何か私にできることはないか探し協力していきたいと思います。

カンボジア、ここが私のアナザースカイ！